

銅山讃歌 「あかがねの回廊」

八子 忠明

プロローグ

私は、一九六二年（昭和三七年）、就職のために遠く新潟県から新居浜に越してきた。当時私はこの地が、かの有名な別子銅山で栄えた町であることを知らなかった。というよりも、社会科で学んで知っていた「別子銅山」が余りにもインパクトが強くて、頭の中で新居浜との繋がりが欠落していたものと思われる。ともあれ、町の中を小さな蒸気機関車がトロッコを引いて走っており、時としてそこから青味がかった銅鉱石がこぼれ落ちる様を目の当たりにして、「おお、これはまさに銅の町だ」との感慨を抱いたことが今も鮮明に蘇ってくる。

その上、化学会社に就職した私たちではあったが、新入社員教育の一環として、住友の原点であるその坑道に入るといふ、想像すらしていなかった恩典（？）に浴することができた。端出場駅でヘルメットを被り、トロッコ電車に乗って。第四通洞から暗い坑道を進む時の心細さ、そしてその奥で見た現場は、ずっしりと重みを感じるほどの湿気の中。私にはたとえ一〇分といえども留まることができないと思われたが、そこには確かに作業をする人々が居たということに、感嘆の声を上げずにはいられなかった。最後に大立坑を一気に上るエレベーターでおよそ六百メートルを一気に第三通洞まで昇り、そこから再びかご電車で日浦に抜け、漸くにして緑滴る現実の世界にホッと一息ついたものだった。しかしその緑もまた、伊庭貞剛という先見性のある先人の手によるものであると聞けば、誰し

も息を呑むしかないだろう。……何もかもが驚きの体験であった。でもそれは既に遠い昔のこととなりつつある。

銅山へのアプローチ

衝撃的ともいえる坑内見学は、私の山に対する意識を変えたように思う。故郷では近くに登山に適した山が無かったこともあって、それほど山に関心は無かったのだが、友人に誘われて銅山峰から西赤石山に至る登山を経験してからのというもの、私は寮生活の気楽さもあって頻繁に周辺の山々を歩く楽しみを知ってしまった。時には一人で、ザックにおにぎりや水筒を偲ばせて、思い描いたコースを気ままに歩くのが好きだった。鹿森ダムから最初の急坂を登り、一息ついたあたりから変化に富んだ緩やかな登り道が続く。左手下には溪流、その上には索道が見え隠れし、景観を楽しみながら歩くことができるのが嬉しい。往時はこの道が仲持ち道として、粗銅を背負って下る人と、生活物資を背負って帰る人々が列をなして行き交っていたというから驚く。その重さに耐えかねて黙々と歩いていたのだろうか、それとも銅がもたらす喜びで、互いに語らい、時には唄をも口ずさんでいたのだろうか。ともあれ、春や秋はいいとして、夏の暑さと雪が積もる冬はどうしたのだろうかかと思ってしまう。こうして道は東平に至る。銅山峰を目指す私はここで谷川にかかる小さな橋を渡り、かつての東平集落を右上に眺めつつ川の右岸に歩を進めると、やがて変電所跡の赤い煉瓦造りの建物が左に見え、さらにその先の第三通洞跡に行き着く。ここで一息入れるのがいつもの習わしになっている。冷たい飲料が心地いい。ついでに通洞の入口に近づいてみる。端出場の第四通洞に比べて間口、高さ共にかなり小さい。トロッコ電車

でここを入っていくときの作業員の心境はどんなものであったか、想いを馳せずにはいられない。中は真つ暗で何も見えず、無限の静寂の中から、ただひんやりとした空気が肌にまつわりつくような感触が、時の隔たりを感じさせてくれる。

通洞の手前を左に進むとここからいよいよ銅山峰への後半に入る、ここでコースは谷を挟んで東西の二つに分かれ、何れを選ぶかを迫られる。若かったこともあり、私はたいてい通称「馬の背」と呼ばれている西のコースを選ぶ。こちらは急な上り坂であるばかりでなく、最後の方では左右が深い谷になっていて、まさにその名の通り馬の背に立ったようなポイントがある。左右の谷から吹き上げる風が足元を不安定にさせるその感覚は、夏でも背筋が冷たくなるような、ある種の快感を味わうことができるのだ。その上、この辺りから左前方に銅山峰ヒュッテの赤い屋根が見え、目的地が近付いていることを実感できるのがいい。こうして角石原に辿りつく。ここは周辺を登山する者にとつてのベースキャンプともいえる場所であり、登るにしても下るにしても、ここで暫しの休息をとるのが習わしで、それによって後のパワーアップに繋がったのである。

魅力的な四季の山々

角石原を拠点として、私はよく西赤石まで足を伸ばした。ヒュッテを馬の背方向に少し戻ったあたりに銅山峰への登り口があり、ただひたすら上に向かって歩くと、突然視界が開けて、峰に辿りついたことが分かる、正確には峰ではなく銅山越えという峠ではあるが、往時にはここを多くの鉱山関係者が往復した交通の要衝であったという。そこには無縁仏を供養したといわれる「峰地藏」が祀られている石囲いが、登っていく我々を迎えてくれ

る。当時の人々もまたこの地藏に往復の安全を祈願したことであろう。周辺は高山特有の、地を這うような木々や岩が露出している。晴れた日には三六〇度の視界が開けるが、六月に登った時には、一寸先が見えないほどの霧に包まれ、寒さに震えたこともあったから、千三百メートルともなると、気候の急変も往時の人々を悩ませたことであろう。少し先へ進んで南側に目をやると、緩やかな斜面がひろがり、旧別子の遺跡群が箱庭のように一望できる。真つ先に飛び込んでくるのが小高い丘の上に建つ蘭塔場。私が初めてそれらの光景を目にした時、「おお、これは！」というのが本音であった。まさかそこに一時は一万人余の労働と生活の場があったなどとは想像すらできなかったのである。しかも今自分が立っている足元の地下に、蟻の巣のように坑道が掘り進まれているなどと、知っていてすら現実の風景とは結びつかない、それほど衝撃であった。その感動を伝えたくて、二人の息子が小学生の中学年になったある日、共にその場に立ったことを忘れることができない。

峰地藏の脇を南に向かつて更に登っていくと西赤石に通じる。この道行も変化に富んで楽しく、頂上付近のちよつとした岩場がシャッターポイントとして絶好の場である。また頂上からは遠く瀬戸内海が眺望できるばかりでなく、秋ともなれば北側の下り斜面一帯がススキの穂波がゆれ、一気に下り降りると銀の波に飛び込んだような錯覚を覚えるほどである、また冬の雪が積もった時には、一面が白とライトブルーの陰影が幻想的な景色を見せてくれ、思わずその新雪に飛び込んで、胸まで浸かった想い出がある。

この近辺でのもう一つの楽しみは四季に目を楽しませてくれる草花である。とりわけ私 が虜になったのがアカモノとリンドウだ。アカモノは角石原の道端で、初夏に白く小さい鈴状の花を沢山つけて、遠目には取り立ててどうということのない花ではあるが、近づい

てよくみると、一つ一つの花は小指の先よりも小さく、その付け根のがく片が鮮やかな紅色をなして、それぞれが思いのままに向きを変えてその様を競っているようで、何ともほほえましく、ついカメラに収めたくなる花なのである。名前のアカモノはがくの色に由来するのであるが、もう少し情緒のあるかわいいう名前をつけてあげたい、と思ってしまうのは私だけではないだろう。一方のリンドウは、これほどつましく清楚な花がほかにあろうかと思うほどに、静かな花である。初秋に銅山峰周辺で他の草木の陰にひっそりと咲いていることが多く、その青紫の釣鐘状の花は何故か、寿命もそれほど長くはないのではないかと勝手に思ってしまう。だからそこに咲かせているのが可哀そうで、つい根から掘り起こして持ち帰りたいという衝動にかられてしまう。しかしよくよく考えればその方がかえって早く枯れてしまうことに気づき、その場にしゃがみこんでしばし見入ってしまうほどである。因みにその花言葉調べてみると「あなたの悲しみに寄り添う」とのこと。ますます好きになってしまうのである。往時の人々もまたこのような花々を慈しみ、慰められもしたのであるが、だがその陰でこの自然を守るために、血の汗を流した伊庭貞銅をはじめ、多くの先達が居たことを決して忘れてはいけないう。今もなお銅山一帯を覆い尽くす緑の木々があるからこそ登山の楽しみがあり、癒しを求めて訪れるのである。これぞまさに誇りうる遺産というべきではないだろうか。

角石原というところ

銅山峰周辺を登山する者にとって、ベースキャンプ的な場所となっている角石原ではあるが、標高一〇〇メートルとはいえ、往時は重要な輸送拠点であったようだ。銅鉱石や

粗銅の運搬が人手から牛車へ、そして鉄道へと代っても、ここは常にその中継地または起点としての役割を担い続けた。碎石で平坦にならされたその場に停車場があり、線路が敷かれていたという。目の前は大きく開けた谷が広がり、左前方が馬の背、右前方が上部鉄道跡、これらがさながら両手を大きく広げて、眼前の谷を包み込んでいるかのように見える。さらに右手には、この鉱山で最も高い位置にある第一通洞の北口がひっそりと佇んでいる。さぞかしここからは行き交う人や牛やトロツコが一望できたであろうと想像する。わたしは背後の旧別子を本殿とするならば、眼前に広がる交通路は、本殿とふもとの端出場や立川の精錬所を結ぶ回廊であって、それが銅鉱石や粗銅を運搬する道であったとすれば、まさに「あかがねの回廊」と呼ぶにふさわしい地形であると思う。この回廊をどれだけの人が、そして物が運ばれたのだろうか。そしてまた、広瀬宰平や伊庭貞剛もまた、この道を歩いたのだろうかと思像するだけで、当時の苦勞をよそに、先人たちの大きな夢とロマンを感じてしまうのである。

そういう歴史が秘められていることとは別に、私はこのヒュッテを何度か利用させていただいた。鉱山を退職されたIさんが建てられ、同時に周辺の自然環境をも整備された、その恩恵に私たちは浴することができた。電気は自家発電に依存し、水は竹の樋で谷から導いて桶に満たされていた。夕食時ともなると、多くのパーティがそれぞれに準備してきた材料を、所狭しとばかりに広げて調理し、それを大部屋に運んで、各パーティごとに車座になって、談笑しつつ食事を楽しんだものである。そして最大の想い出は何といつても就寝用の布団。背丈にはやや足りない幅の、薄い綿入れの布がロール状に巻いてあるのを誰言うともなく借りてきて部屋一杯に広げ、それを二枚重ねたのが寝床となる。グループ

ごとにある程度まとまることはあっても、隣との間には何の仕切もなく、男も女も一つの布団にもぐりこむのである。これがきっかけでロマンスに発展したケースもあったのではないかと想像するが、反面それが元で不祥事があつたとも聞かなかつたのは幸いである。

冬。そこは銀世界とまではいかないが、ある程度の雪が低木を覆い、まるで山水面を見るような景観となる。丁度ヒュッテ辺りは日陰になつてることが多いため、午前中くらいは雪の表面が凍つていてスキーにはもつてこいの状態となつた。ヒュッテで借りたスキーを履いて、初心者にはヒュッテ横の大根畑の窪地に向かつて滑り降りる程度ではあつたが、結構楽しめたものである・・・あれもこれも、良き青春の一駒であつた。

鉄路の回廊

「あかがねの回廊」で、馬の背と共にその一面を占めるのが上部鉄道である。私がこの跡を辿つたのは秋もだいぶ更けてきた頃だつた。赤や黄色の落ち葉が道いっぱい、しかも厚く敷き詰められ、それを踏みながら歩を進める贅沢さは、アカデミー賞の赤絨毯をもつてしてもこれには及ばないと思えるほどの感動だつたのを、今でも鮮明に思い起こすことができる。私はその時不謹慎にも、次に訪れるときには「愛する人と一緒に」などと、叶わぬ夢を抱いたものであつた。ともあれ全コース約五・五キロメートルは起伏が少ないものの、山と谷の間を縫つていられるために、ジグザグ状且つ、谷を渡るには橋が必要であり、長くはないが様々な橋が架けられていたようである。今となつては当時の橋が朽ち果てて、苔むした茶色の煉瓦積み橋脚だけが今なお面影を残しているものの、代りに木の橋が架けられている場所が多く、それすらも手入れが行き届き難い上、雨ざらしのこととて朽ちかけており、恐る恐る渡つたのが何箇所かあつたように記憶している。

明治二十年代に、広瀬宰平がここに鉄道を敷こうと考えた、その発想の大胆さに驚かされるとともに、それを成し遂げた手腕は現代においても経営の範ともなりえる偉業ではないただろうか。山肌を削り、橋を架け、全ての資材をふもとから担ぎあげて現地で組み立て、線路を敷き、機関車やトロッコを組み立ててそこに走らせる・・・この構想に確信を得た根拠がまたいい。還暦祝いとして欧米を旅行した際に、ロッキーマ脈のコロラドセントラル鉱山で、その原形となる山岳鉄道を見たことだつたというのである。「アメリカ人に来て、日本人に出来ぬはずはない」という信念が彼を動かしたとすれば、人間の能力は年齢では決まらないことの実証でもあろう。しかし、彼の業績全般を見れば、この一件に限らず、経営者としての彼の眼は常に遠く外国に向けられていたことがよくわかる。周囲の反対を押し切つて、フランス人技師ラロックを雇い入れる一方、塩野門之助をフランスに留学させ、当時の先端技術をこの銅山に投入した功績は余りにも大きく、彼の業績を顕彰するために、上原の広瀬邸に隣接して広瀬歴史記念館が建てられたのも当然である。

記念館に展示されている上部鉄道の写真は、岩の切り通しを走るものであり、背景は空であることから、その高さが想像できる。また模型として置かれていた機関車も、その場をイメージするものとなつており、まさに山岳鉄道の名に相応しい光景といえる。実際その場を通つてみると、周辺の木々が生い茂つているものの、写真のイメージは未だ損なわれていないように思われる。ともあれ、私がこのコースの最も好きところは、枯れ落ち葉はさておき、コース前半の大部分の地点から、谷の向かい側のヒュッテが見え隠れすることである。まるで大声を出して叫べば応えてくれそうな距離感が、何とも言えない強い

がりを感じさせてくれるのである。さぞかし、その昔この機関車を運転した人も、叫びこそしなかったかも知れないが、角石原で働く人々をその目で捉えつつ、強い連帯感をその距離から掴み取って、石炭をくべる手にも一層の力がこもったのではないだろうか。

しかし、これほどの施設が明治二六年に開通してから、四四年に廃止されるまで、僅か二〇年足らずでその役割を閉じたと聞けば、私ならずとも多くの者は残念以上の深い想いに駆られること必至である。せめて現在もこの場に雄姿を留めて、登山する者の特典としてこれに乗り、その回廊を巡ることができたなら・・・など想像してみるが、見果てぬ夢にしか過ぎないのだろうか。私はここを「鉄路の回廊」と呼びたい。

エピソード

別子銅山の歴史的産業遺産が、いま自分が住んでいるこの町の奥に眠っている！。この事実を知って、赤石山系の山歩きが好きになった私ではあったが、二〇〇五年に登ったのを最後に、遠ざかりつつあることに寂しさを禁じ得ない。同じような鉱山では石見銀山がユネスコの世界遺産に登録されて既に五年目になるが、別子銅山がこれと同じ試みをするのがよいのかどうか、私は実のところ答えを持たない。持てないという方が正しいかもしれない。いつか石見を訪ねて地元の人々に、その辺の想いを聞いてみたいとも思う。

今、現役 of 赤石山系愛好者がどれほど居られるのだろうか。私たちが体験したように、長い時間をかけて、汗をかきつつ、登った後の達成感と清涼感に満足する時代が過去のものとなってしまった今、身近な所に「マイントピア」「別子記念館」「広瀬歴史記念館」があることは、それなりの効果をあげてはいるだろう。また銅山近くまで車で行くための道路整備がなされているのも、その意味で理にかなっているかもしれない。それでもなお歴史的産業遺産の継承という大命題の上には、新居浜市の歴史そのものがかかっている。その新居浜市の今は、産業が衰微の兆候を示し、大きな変革を余儀なくされている、という現実があることが問題を難しくしているのだと思う。

そもそも何故歴史的遺産を作るのか？、その価値とは？。例えば広島原爆ドームは、それ自身負の遺産でありながら、「二度とこのような罪を侵さないように」との大きなメッセージを込めた象徴としての意味がある。他方、別の遺産では観光資源として実利を追求する向きもあろう。果たして別子銅山の場合、遺産として将来に向けて訴えるメッセージは何なのか——。私はズバリ『産業と自然の調和』だと思う。そう考えた時、今後の方向性として見えてくるのは、「銅山一帯の自然公園化」である。壮大な夢ではあるが、それによって「あかがねの回廊」が蘇り、沢山の人がそこを散策できるようになる・・・。なんと素晴らしい夢か、と自賛するのである。

銅山の歴史に直接関わった先人以外に、それを多くの人々に伝える地道な働きをして来られた方々をも覚えずにはいられない。本文中に記したヒュッテの管理人Iさんを始め、銅山の人々の日常生活を切り取って写真として残されたHさん。また、南高等学校に於いて、情報科学部の自主活動の場で熱心に指導された先生と、その下で集めた膨大な情報を検証整理して、インターネットや、色々な発表の場で多くの人々に知らしめている生徒の面々・・・。そして住友史料館、広瀬歴史記念館、別子記念館などの施設で啓蒙活動をされている方々に深い敬意を表すとともに、その活動が途切れることなく、且つ有機的に連携しつつ、今後も続いていくことを願って止まない。

(完)